

心の輪を広げる体験作文

【小学生区分】最優秀作品

千葉市立蘇我小学校 六年

## 「見える事見えない物、障害と努力」

天辰 友紀

私は小さな頃から体を動かすのが大好きで小学校の運動会では毎年リレー選抜選手として活躍してきた。しかし、今は学校の体育の授業をずっと見学している。

今年の二月、私は自転車に乗っていて、車にひかれ救急車で病院に運ばれた。

全身を強く打ち、特に頭のけがは重かったため、手術をした。何日もうつらうつらの状態で過ごし、やっとのことで起きている時間が寝ている時間より長くなってきた。

しかし、自分ではベッドから起き上がれず食事やトイレも介助が必要になり、いつもなら少し手を伸ばせばつかめるペットボトルの水もお願ひしないと飲めない状況になった。

そんな中、車いすに乗りリハビリを受けることになった。

車いすの移動は思ったより気を使った。私がエレベーターに乗ると場所をとり、エレベーターに乗り込むのをあきらめる人もいた。先に乗っていた人達は詰めてくれた。私は申し訳ない気持ちや気まずい気持ちになった。

「ありがとうございます」と気持ちを言葉にすると気が楽になった。これまでよりもあいさつや感謝の言葉をきちんと言うように心がけた。

病院のリハビリ室では多くの人が多くと病気やけがで衰えた動きを良くするように頑張っていた。私もつかまり立ちの歩行訓練から始め、自転車こぎや一階から八階までの階段の昇り降りを繰り返して体力やバランスの回復に努めた。

リハビリにはいつも穏やかに励ましてくれるリハビリの先生が付き添ってくれた。「困ったことはないですか」と気にかけてくれた。

私はリハビリ中に先生と話をいっぱいしてリハビリがづらい時も一緒に頑張ることができ、前向きにこつこつと毎日リハビリを続けられた。

また、繰り返し折り紙を折り、二百程折った折り紙を使いきつねの置物が出来上がる頃には握力も戻り、ペットボトルの水も自分で飲めるようになり、食事も自分で食べられるようになった。

私は、毎日リハビリを続けたおかげで体力が戻り、歩ける距離も長くなった。学校に通えるようになった。

だが、漢字が以前より書けなくなり、六年生なのにひらがなだらけの文書を書くようになり、計算速度も遅くなり、もどかしさをかかえるようになった。

その後、私は交通事故が原因で高次脳機能障害になったと診断され、リハビリ専門の大きな病院に通院することになった。

診察してくれた先生は「高次脳機能障害は体を見て明らかに分かる障害ではなく、人に理解されにくく、誤解されることが多い障害だ」と教えてくれた。私はこの言葉を深く受け止めた。

ところで、言語のリハビリを受けに病院に通うようになり、気付かされた事がある。

病院の長い廊下を利用して歩行訓練をしている人が何人もいた。

足を補助するための装具をつけ、歩行器で体を支えながら歩く人、足こぎ自転車でゆっくり進む女の子もいた。自転車をこぐ女の子はリハビリの先生に「頑張ったね」とほめられ弾けるような、ほこらしいな笑顔になった。見ていた私にも嬉しさが伝わってきた。

私はこの時はとした。自転車をこぐ女の子は長い間訓練をつみ重ねた結果、今の姿があるのだと気付いた。その努力の一つ一つは眼には見えないがとても大事な道のりだっただろう。

もし、町で障害者にあつたら今までの私なら、可哀そうと、あわれみの気持ちを持って見ているだけだっただろう。

だが、今なら、「人には分からない努力のつみ重ねを続けたので、こうして街に出かけることができたんですね」という尊敬の気持ちを持ちたい。そして、話しかけたいと思う。

さて、私は五年生の頃から友達と「たんぼぼ学級」と呼ばれる特別支援学級に行き遊ぶのが好きだった。カードや百人一首をして遊ぶのだが、これからでもいいやりや尊敬の気持ちを持つて今まで以上に楽しく一緒に遊んでいきたいと思っている。

私のリハビリはこれからも続く、くじけそうになったり、落ち込む時もある。道のりは遠くても努力する気持ちを持ち続けたい。

最後に私を支えてくれる家族、温かく見守って下さる学校の先生、気持ちよく苦手なことを手伝ってくれる友達、前向きな気持ちになるよう励まして下さる病院の先生に感謝の気持ち进行伝えたい。